地域に根ざし地域に貢献する
高校生リーダーを目指して

熊野高等学校　三年　新田　弥生

私たち、熊野サポーターズリーダー部は主に四つの活動を行っています。一つ目は、毎週火曜日の放課後、上富田町内の一人暮らしのお年寄りの家に訪問し交流を深める『ハートフルチェックボランティア』。二つ目は、学童保育に通う小学生たちに絵本の読み聞かせをしたり、宿題のサポートや夏休み中によさこい踊りを教えたりする『学童保育ボランティア』。三つ目は、夏休みの間、障がい児施設を訪問し、ヒップホップダンスやよさこいを披露したり、ホットケーキ作りやバルーンアートなどの交流を行う『障がい児の夏期保育ボランティア』。四つ目は、上富田町、田辺市、白浜町における行政のお祭りや、老人ホームや障がい者施設での舞台演舞と『イベント活動ボランティア』です。これらのボランティアは三年前から始まり、最初はその日だけ取り組む活動がほとんどでした。しかし参加するごとに地域・世代によって様々な問題や課題が見つかり、これらの問題を解決する方法はないかと考え始めました。そこで『サービスラーニング』に取り組み始めました。『サービスラーニング』とは、教室で学んだ知識や技能を地域社会の困っている人たちに広げて生かすことで地域に貢献するという気持ちを養っていくという『問題解決学習』です。

二年程前、ある新聞記事で目にした言葉が今でも残っています。それは『口』は、人を励ます言葉や感謝の言葉を言うために使おう。『耳』は、人の言葉を最後まで聴いてあげるために使おう。『手足』は、人を助けるために使おう。『心』は、人の痛みがわかるために使おうという言葉です。せっかく人間として生まれてきたのだから、自分自身のためだけではなく、誰かの役に立つという、本来人間が持っているやさしさを忘れてはいけない。この言葉は私の胸に大きく突き刺さりました。そして、私がクラブのボランティア活動でまさに現場で感じていることと大きく関係していたからです。

高齢者の声かけ訪問で、おばあちゃんからこんなお話を聞きました。週に一回、一キロメートル先のスーパーに一時間かけて歩いて行く。いわゆる買い物難民の問題です。私はおばあちゃんの話を、目線を合わせて何度もうなずき、聞いてあげることしかできませんでした。本当になんとかしてあげたいと思いました。しかしその場面では励ます言葉がでませんでした。一方、麻痺がひどく寝たきりの男性が、私たちの訪問をきっかけに身の回りのことを自分でするようになり、夕方散歩に出かけるまでに回復しています。嬉しい成果が現れた出来事でした。

学童保育ボランティアで、共働き家庭が増える中、年々学童数が増えています。そこで読み聞かせや運動遊びのサポートをすることで信頼関係を築くことができました。

重度の障がいを持ち、夏でも布団をかけて大きな車いすに乗った女の子の前で、数日間よさこい踊りを披露しました。何日目かに、今まで支援員の先生も見たことがないほどの反応を女の子が示してくれました。これを機に、支援学校の授業の中によさこい踊りを取り入れていくことになり、きっかけづくりとなったことがとても嬉しかったです。

これら数々のボランティア活動を通じて、冒頭で話した言葉通り、自分自身のためだけでなく、誰かの役に立つということは、その場に立って本来人間だれもが持っている「やさしさ」なんだと気付きました。

私たち熊野サポーターズリーダー部員が地域の人々に対してできることはほんの微々たることかもしれません。しかし、急速な少子高齢化による弊害を少しでも和らげ、地域活性化の糸口となればいいなと思います。

私は将来、子供と接する仕事に就きたいと考えています。私が熊野サポーターズリーダー部員として経験したことをこれからの人生の糧として、人に対する優しさを忘れずに頑張っていきたいと思います。